# 現代剣道と『五輪書』(I)

## ——基礎的動作の比較考察——

下島　浩二・藤堂　良明

### 1.　はじめに

近年の剣道の技術，試合は，「刃筋の通らない打突」，「当てるだけの打ち」さらに，「あまりにも勝負に拘泥りすぎる」等々と言われるくらいに競技化，勝利至上主義になり，その本質から外れてしまった観が強い。こうした世論の背景から，全日本剣道連盟では剣道の姿勢を正すことを目的に，先に「剣道の理念」と「剣道修錬の心構え」の定義を制定し，それに沿って試合・審判規則の改正や段位・称号審査の規程の改正を実施したことは，周知の通りである。

つまり，理念制定のねらいは，本質を忘れた試合本位の剣道が主流をなすようになってきたこと，また，長い伝統に培われてきた日本の文化遺産としての剣道も，やがては衰微の方向をたどると考えられることに対して，今後の剣道の方向を正す柱として指標を掲げたものであり，正しい内容のある剣道の普及と発展をねらったのである。さらに，試合・審判規則の改正については，改正箇所にもよるが全体的に，古来より必要とされた理論を重要視したものや，柔道競技の有効や効果といったポイント制を盛り込んだ国際ルールに似た，試合に積極性を望む内容であり，また，試合時間の長引きに対しても試合の活気を失われるとし，その欠点を補うための処置等である。要するに，スポーツ化しすぎを歯止めしたのである。

しかし，ここで大きな問題が再び提議された。それは，そもそも剣道が，戦後学校剣道を中心として体育の中のスポーツであるという指導理念のもとに再出発したことを考えると，なぜ，いまさらスポーツ化しすぎてはいけないのかという問題である。すなわち「剣道はスポーツであるか，武道であるか[1]」といった二者択一的な論議であり，今なお課題とされていることである。

さて，現在，少年剣道が盛んに行なわれたことによって，ブームと言われるまでに剣道人口が増え，各種大会が盛り沢山に行なわれている中，上記の問題を含め様々な問題が表面化してきた。それは，剣道の試合が増えたことによって，また生じてきた勝利至上主義である。特に，最高の大会である全日本剣道選手権大会への批判が挙げられる[2]。それに伴い審判の判断の相違，段位審査への疑問，さらに，少年剣道に関する諸問題[3]等が生じてきた。

このように，先述した剣道の理念等の制定および試合・審判規則の改正にも関わらず，上記の諸問題が生じたことは，そもそも剣道の根底にある「あるべき姿」がはっきりと確立されていないためといえる。つまり，本来剣道として一体であるべき「形」や基本技術，稽古，試合，さらに，段位審査をそれぞれ区別して捉えている点にある。試合は勝敗が主であり，段位審査は姿勢・態度や技術的な内容を理念に当てはめているといったように，その評価基準がはっきりと異なっている。また，「形」も単に大会における模範演武のひとつとし，或いは段位審査のために必要としてしか受け取られていないのであり，「形」に対する観念が薄れているのが実情である。

さらに，このような問題が反映してか，最近，剣道関係の雑誌等に，現在の剣道を「古流の形」によって見直そうとする試みが，徐々に現われている[4]。この傾向は，剣道の理念「剣道は剣の理法の修錬による人間形成の道である。」を顕在化するために，古流の技を現在の剣

道の技術に活かそうと試みられたものである。すなわち，剣の理法とは，刀剣による攻防の理法であると理解してのことであり，それを「日本剣道形」を始め，保存武道として伝承されている「古流の形」に求めたのである。

つまり，現在の剣道の技術は，竹刀を用いて相手の定められた箇所を打ち，当てればよいわけであり，特に，斬るように打てとは，どこにも成文化として要求していないのである。しかし，剣道の理念のように潜在的に竹刀に刀の操作の原理を生かそうとしていることは事実であり，さらに，そこに内在する精神的なものをも伝承させようとしている。すなわち，「技術は精神を生み，精神は技術を生かす」という，伝統的文化性をもつ故に，竹刀の操作を刀の操作に準じさせようとするわけである。しかしまた，この古流の刀剣による攻防の理法を，如何に現在の剣道に導入させるのかが今日，最も重要な課題でもある。

そこで本研究は，こうした観点から古流の刀剣による攻防の理法を，宮本武蔵の『五輪書』[5]（二天一流）に立ち返り，現在の剣道の技術を見つめ直す基礎的作業を試みた。その第一次的作業として『五輪書』の「水の巻」に述べられている基礎的な諸動作について考察し，現在の剣道の技術に対応する基礎動作と比較を行なった。

## 2. 現代剣道と二天一流の基礎的動作

この「水の巻」は，二天一流の認識論を説いている。それは，心の持ち方から始まって姿勢，目付，刀の持ち方，足の使い方，構え方，振り方等々，技を用いるための基礎的な動作であり，いわば，主体的な力を養う方法を主旨としている。

### 1). 姿　勢

まずはじめに，現在の姿勢という言葉の意味について考えてみる。矢野一郎[6]によれば，「姿」は外見的な型で静的な面を，「勢」は内面的な力で動的な面を表わし，この両者を組み合わせて，内に力をこめた型を意味している。また，運動の姿勢には静的な姿勢と動的な姿勢があり，この両者を剣道の動作に当てはめてみると，前者が「構え」という基本になる体の姿勢，後者は技を行なう際の諸姿勢ということになる。しかし，剣道界ではこの両者を区別して考えず，同様に考える傾向が強い。

さて，この「水の巻」においては，「兵法の心持の事」と「兵法の身なりの事」に戦闘時の心の持ち方，体の姿勢について心理的・身体的に詳しく述べられている。例えば，「兵法の身なりの事」に「身のかゝり，顔はうつむかず，あをのかず，ひずまず，目をみださず，ひたいにしわをよせず，まゆあいにしわをよせて，目の玉うごかざるやうにして，またゝきをせぬやうにおもひて，目をすこしすくめるやうにして，うらやかに見ゆるかを，鼻すじ直にして，少おとがいを出す心なり。…」（78頁）と戦闘時の姿勢を具体的に述べている。

そして最後に「常の身を兵法の身とし，兵法の身をつねの身とする事肝要也。」（79頁）とある。この「常の身」とは日常の際の姿勢であり，「兵法の身」とは上記の戦闘時の姿勢，すなわち，刀を持っての「構え」の姿勢である。つまり，日常の際の姿勢を戦闘の際のようにし，戦闘の場合にも日常と同様の姿勢で戦うことが大切であるということである。

したがって，武蔵の姿勢とは，日常の際から絶えず敵を意識しながら身に付けていくことを指摘したものと考えられる。そして，そこに関わる意味内容として，刀を持って構えるという潜在意識によって成り立っているのである。これは，現在の剣道の基本となる姿勢である「自然体」を意味するものと受けとれる。この「自然体」とは，一般的にいつでも相手に対処できる姿勢であり，静的姿勢を意味し，すぐに動的姿勢へ移れる姿勢と理解されている。また，矢野一郎は「最も敏速に反応できる出発姿勢であり，また，安定度が高く，疲労が少ない姿勢である。[7]」と身体的な意味について述べ，良い姿勢のひとつとされているのである。

このような意味において武蔵の姿勢は，現在

の姿勢である「自然体」に最も影響を与えたものといえる。しかし，そこには質的な価値観の違いがみられる。それは，武蔵が目的（斬ること）達成のために，この姿勢そのものには拘らないという自由性をもっているのに対し，現在の剣道では目的（有効打突獲得）達成のためにこの姿勢が必要条件とされ，判定基準のひとつの要因となっているため，そこに専門的な特定の姿勢として固定されているといえるのである。つまり，試合においては，試合規則第17条に「有効打突は，充実した気勢・適法な姿勢をもって打突部で打突部位を正確に打突したものとする」と明記されており，さらに段位審査においても姿勢・態度が重要な評価対象となっているのである。ただし，このことは静的姿勢だけでなく，動的姿勢についても関わってくるのである。また，剣道において「元に帰る」ということを技術的原理としているため，打突後の姿勢についても関わっているのである。例えば，打突した後，竹刀を元の構えた位置に戻し，相手に余力を見せることと次の動作に備えるという「残心」である。したがって，姿勢も同様に動的姿勢になってもすばやく静的姿勢に戻すこととされている。

このように，現在の剣道においての姿勢は，武蔵の姿勢でもある「自然体」を理解しながらも，それをある専門的な特定の形にはめているといえるのである。つまり，構えの姿勢，打突時の姿勢，打突後の姿勢（構えの姿勢）と分けて捉えているのである。

2)，目　付

目付は，，姿勢および構えた時の相手に対する目くばりのことである。武蔵は，「兵法の目付と云事」の中で戦闘時の目の付け方を「観見二ツの事，観の目つよく，見の目よはく，遠き所を近く見，ちかき所を遠く見る事」さらに，「目の玉うごかずして，両わきを見る事」（80頁）等たいへん興味深い文句を残している。

この観の目とは，物事の本質を見抜くことであり，見の目は表面の動き，現象を見ることである。つまり，「観の目つよく，見の目よはく」とは，その本質を見抜くことが第一であり，表面的な動きは二の次にせよということを意味する。また，「遠き所を近く見，ちかき所を遠く見る事」とは，遠い所の様子を詳しくつかみ，近き所では相手の刀さばきを見ながらも，本質を見抜くようにしなければならないということである。

この項では，現象に捉らわれず絶えず本質を見抜くように，姿勢と同様に日常からこのような目付を身に付け，どのような場所にもそれが保たれるように心がけることを指摘したものと思われる。また，この武蔵の目付は現在の剣道に当てはめればたいへん高度な目付といえ，熟練者になって理解できるものである。しかし，われわれ指導者にとっては，もっと具体化した初心者にも理解できる目付を望むものである。つまり，どこを，どうやって見れば相手の動き，本質をいち早く見抜くことができるのかが問題となる。後に他流では，次のように指示している。円明流「心は顔面に表はれるものであるから，目の付け處は顔に及ぶものはない」，一刀流「剣先に目を付け，拳に目を付け」[8] 等，流派によって異なっている。

それでは，なぜ武蔵は目付を一定の箇所に指示しなかったのであろうか。このことについては，「風の巻」の「他流に目付と云事」に次のように説明している。「大小兵法において，ちいさく目を付る事なし。…濃にちいさく目を付るによつて，大きなる事をとりわすれ，まよふ心出きて，慥なる勝をぬがすもの也。」（204頁）と，大勢もしくは一対一の勝負でも，細かい部分に目をとらわれてはならないとし，もしこの細かい部分に目を付ければ，大局を見落し，心に迷いが生じて確実な勝利を取り逃がしてしまうと説いている。つまり，目付を固定すると現象に惑わされるということから，ある一定の箇所を見ることを否定したものと思われる。

ところで，現在の剣道の目付に対する認識はどうであろうか。一般的に，相手の目，顔，拳，全体，竹刀の剣先を見る等々と個々に違うものであり，様々である。また，指導書においても

一定の箇所を指示してなく，大半は古流のおしえを取り挙げて活用しているのにすぎなく，中でもこの武蔵の「兵法の目付と云事」は，重要視されている。

しかし，ここで考えられることは，現在の剣道の特性から武蔵の目付を当てはめてみると，その目付の範囲が幾分狭まるのではないかという考えである。つまり，剣道は対人的関係の中で竹刀を用いて約束部位（面，小手，胴，突）を打つ，突く等の対人的相互作用であり，さらに試合は，規範，ルール，空間，時間，防具等の様々な客体要因によって構成されているからである。したがって，現在の剣道では相手の本質（どこをねらっているか）についての目付が幾分ではあるが狭まっているといえよう。しかしその反面，相手の打突部位への打突技術が難しくなっているのである。

3). 刀（竹刀）の持ち方

この項では，刀の操作に最も関連深い持ち方であり，現在使用している竹刀との違いである重さ，長さ，柄の長さ・形等の用具の変化に対して，どこまで武蔵の刀の持ち方に影響されているかである。もちろん，根本的な違いである「斬る」と「打つ」との技術を含めてである。

武蔵の持ち方は，「大指ひとさしを浮る心にもち，たけ高指しめずゆるまず，くすしゆび小指をしむる心にして持也。手の内にはくつろぎのある事悪し。」(82頁)と述べ，薬指と小指に力を入れて握り，親指，人差指は軽く握り，中指は絞めず緩まずとし，手の内の中に緩みがあるのはよくないとしている。また，いつも相手を斬るということを心において持たねばならぬとし，如何なる場合においてもこの持ち方に変わりはないと説いている。この意味において武蔵の持ち方とは，斬る時に必要な「絞る」という瞬間の握りを基にしているといえる。

そして，最後に「惣而太刀にても，手にても，いつくとゆふ事をきらふ。いつくはしぬる手也。いつかざるはいきる手也。」(83頁)と述べ，「いつく」とは固定化を意味し，持ち方が固定してしまっては「死」につながり，固定しないことは「生」につながるとしている。これは，前項の姿勢と同様にあらゆる動き，変化に応じられる準備をここでは手の内でおしえている。

現在の剣道においては，構え方(中段の構え)と関連させ竹刀の持ち方を指導しており，武蔵は左右同様として述べているのに対して，左右使い分けている。つまり，右手を支点として左手を力点とする槓杆作用の打ち方を行なうため，右手は軽く持ち，左手はしっかり持つことである。また，具体例を用いた持ち方として，「玉子を握るように持て」や「自転車のハンドルを持つようにする」等，武蔵の言う「いつかざる」すなわち，固定しないような持ち方を説明している。

さらに，握り方および打突時に必要な手の内の「絞る」については，谷田左一の言う「ぬれ手拭を四つ折にして縦に持ち，之を絞るやうに[9]」とか，高野佐三郎の「太刀を絞め左右の拇指，薬指，小指をもつて絞るごとく[10]」と述べているように，手の内で一番強く握れる状態を用いている。これも武蔵の斬るための握り方と同様である。

このように，現在の竹刀による持ち方に関しては，武蔵のおしえが活用されうるものといえよう。しかし，打突時に必要な槓杆作用を用いるための持ち方としては，疑問がある。

4). 足の使い方

この項では，現在の剣道との違いがはっきりみえるところである。つまり，斬る時と打つ・突く時の足の使い方が異なっている。一般的に考えられることは，前者が両足を踏んばって行なうのに対し，後者は飛び込み（踏み込み）という動作によって行なうからである。

武蔵は，「足つかひの事」として次のように述べている。「足のはこびやうの事，つまさきを少うけて，きびすをつよく踏べし。足つかいは，ことによりて大小遅速はありとも，常にあゆむがごとし。足に飛足，浮足，ふみすゆる足とて，是三ツきらふ足也。」(84-85頁)つまり，足の運び方は，爪先を少し上げ，踵を強く踏む

ようにして行ない，足の使い方は自然に歩くようにすることであり，飛ぶような足，浮きあがるような足，さらに地面または床に固着する足等はよくないと説いている。すなわち，現在の剣道に必要な足の使い方を否定しているのである。

さらに，「陰陽の足と云是肝心也。」(85頁)と述べ，片足だけを動かすのではなく，絶えず左右，右左と足を運ぶことと説いている。これは，片足を動かしただけでは体の移動にはならないからである。

さて，現在の剣道の足の使い方はどうであろうか。前述した斬るためと打つための動作以前の，構えた足の状態から異なっている。つまり，剣道の打突動作において飛び込み（踏み込み）足を使うため，如何に早く飛べる，各々にあった足の位置を設定することからである。そのために，右足前，左足後の位置にし，さらに飛び込む時に必要な蹴る動作を行なうため，左足の踵を上げるのである。

また，この足の状態から飛び込み動作を行なう以前に，その状況に合せ各種の足さばきを使い分けている。例えば，相手との距離が長い場合に近寄るために用いる，日常歩行の場合と同様な運び方の「歩み足」，比較的近い距離を動く場合に後足を送り込むように引き付けて移動する「送り足」，体を左右にさばく時にさばく方向の足を斜め前に出し，後足を引き付け，その時に腰を捻って体をかわす「開き足」，遠い間合から打突する場合に後足を引き付けるように出し，その余勢で前足を大きく前に踏み込む「継ぎ足」の四つの使い方がある。さらに，これらは武蔵の言う「陰陽の足」を使うものであるが，日常の歩行の動作ではなく「すり足」という床をすりながら行なうものである。

以上のことから武蔵の足使いは，歩むようにとあるのに対し，現在の剣道ではその状況によって四つの足さばきを使い分けているのである。また，武蔵は足使いに入る以前の構えの足の位置を設定していないのである。これは，前項の姿勢，目付，刀の持ち方にもみられた固定化を否定したものと考えられ，「兵法の身なりの事」で言っている「常の身」の足の位置から行なうものと思われる。

5). 構　え

武蔵は，構えを三つに分けているといえよう。それは，心の構え，身の構え，刀を持つての構えである。心の構えとは，「兵法心持の事」に表わされ，身の構えは，前項の姿勢，目付，足の使い方等にみることができる。もう一つの刀を持っての構えは「五方の構の事」と「五つのおもて」で，上段・中段・下段・左脇・右脇の五つの構えについて述べている。この構えとは，刀の位置を示し，「おもて」とはそれが相手に向って動くこと，つまり，技および打ち方を意味するものである。そこで本項は，基礎動作としての構えについて考えてみる。

「五方の構の事」では，「構五ツにわかつといへども，皆人をきらん為也。構五ツより外はなし。いづれのかまへなりとも，かまゆるとおもはず，きる事なりとおもふべし。」(86頁)と述べ五つの構えとも全て人を斬るためであり，構えはこの五つの他はないとしている。さらに，どの構えにせよ，構えそのものに拘らず何より相手を斬ることが肝要であると説いている。つまり，形式（構え）よりも目的（斬ること）を重視せよということである。また，「上中下は体の構也。両わきはゆふの構也。」(86頁）と述べ，上・中・下段の構えは定まった基本の構えであり，中でも中段は「構の本意也」，「大将の座也」と構えの中心であるとし，続いて後の四つの構えが従うと説いている。これは，中段は定まった構えであるがすぐに他の構えに応用できる構えであると解釈することができる。

現在の剣道においても，次の五つの構えがある。これは「古流の形」を統一して作成された「日本剣道形」にある，上段・中段・下段・脇・八相の構えであり，武蔵の五つの構えと若干異なるものである。この相違点について佐藤卯吉は，「後世になって用いられた，上段・中段・下段・脇構え等の特定の構えとは意味が違う。名称は同じでも用語の内容には自由性がある。」

と述べ，さらに武蔵の構え方について「構えるという意識の下に有意的に構えの形を作るというよりも，攻撃防御のためにとる自然の体勢を結果から見て，このように五つに大別しうるというにすぎない。」と説明している[11]。つまり，武蔵の五つの構えとは，決められた特定の形をとることではなく，その時々の状態に従って相手に対応できる体勢を表わしたものといえる。

また，この武蔵の構えに対する考え方，態度については「有構無構のおしえの事」で次のように説明している。「有構無構と云は，太刀をかまゆると云事あるべき事にあらず。され共五方に置事あればかまへともなるべし。太刀は敵の縁により所により，けいきにしたがい，何れの方に置たりとも，其敵きりよきやうに持心也。」(95-96頁)と，固定した構えを否定し，その状況に則して最も有効に攻撃できる自由な態度であり，絶えず攻撃のための構えであるとしている。

次に，現在の剣道における構えの考え方，態度についてはどうであろうか。普通われわれが構えということを考える時には先入観があって，始めからある特定の身体動作をとることを想像する。つまり，技術的に必要な特定の身体的形をとることであり，相手の動作・場所・場合・力量等に関係なく単一的に捉えていることである。

この現在の構えについて中野八十二は，次のように指摘している。「構えとは，いかなる攻撃をされても絶対に防げるだけの強さをもったものでなければならない。その絶対に打たれない構えをもって打てるところまで行って，相手を打つ気持をいつまでも，もっていなければならない。」[12]と武蔵が述べていなかった，防御についての構えも含めいてる。つまり，そもそも構えるということは，受身であって相手の出方を待って変化するというのであるから自然に後手となる。しかし，剣道ではこの後手になることを禁物であるとしているために防御の構えでもあり，攻撃の構えでもあると捉えられているのである。

このように，武蔵の構えと現在の剣道の構えに対する考え方，態度については，意味内容が違うものと考えられる。中でも最も異なることは，武蔵は目的（斬ること）達成のために形式（構え）そのものには拘らないのに対して，現在の剣道では前項の姿勢でもみられた，目的達成のために形式を重要視していることである。つまり，前者は構えに自由性をもっており，後者は特定の構えを固定化しているのである。

さらに，五つの構えに対する認識の相違いである。武蔵は「有構無構のおしえの事」で述べている，自由なる体勢であって絶えず攻撃のための体勢であるとしているのに対し，現在の剣道では，五つの構えをそれぞれ個々の構えとして特定化していることである。それは，上段の構えは攻撃の構えであり，中段の構えは攻防ともに安全確実かつ自由自在の構え，下段の構えは防御の構え，八相・脇構えは，相手の動作を監視する構えと捉えられているのである。

6). 刀（竹刀）の振り方

これは，刀の操作にとって最も大切な刃筋についての問題であり，それは体の正中線に沿った円運動である。また，前項の基礎的な諸動作がこの運動の基本となるのである。

武蔵は，この振り方を「太刀の道と云事」に次のように述べている。「太刀の道を知と云は，常に我さす刀をゆび二ツにてふる時も，道すじ能しりては自由にふるもの也。太刀をはやく振んとするによつて，太刀の道ちがいてふりがたし。太刀はふりよき程に静にふる心也。」(87-88頁) つまり，刃筋を知っていれば，さほど力は必要でなく自由に振れるものとしている。また，斬るための振り方としてこの刃筋を心得え，振りよきように静かに振る気持が必要であるとし，あまり早く振ろうとすると，刃筋が乱れ相手を斬ることができないと説いている。

さらに，「太刀を打さげては，あげよき道へあげ，横にふりては，よこにもどり，よき道へもどし，いかにも大きにひぢをのべて，つよくふる事，是太刀の道也。」(88頁) とあり，振った後の戻し方（振り上げ）について述べてい

る。すなわち，武蔵は振り下ろしと同じ軌跡によって戻すことまでを，刃筋と捉えているといえよう。また，そこに関わる意味として考えられることは，元に戻ることによって次の動作に備えられることであり，正しい刃筋を意味するものと思われる。

さて，現在の剣道においては，竹刀を刀にたとえ竹刀の弦の反対側（刀の刃の部分）で，全長の三分の一のところを打突部として定め，この部分で打突しないと有効打突とはならないとしている。（試合規則では「打突部で打突部位を」となっている。）つまり，竹刀の振り方も刀を用いた振り方と同様に行なわなければならないのであり，上記の武蔵のおしえは活用することができるといえよう。しかし，振り方の方向については，体の正中線を基にしているため，武蔵の横に振るおしえは禁物とされているのである。また，武蔵の「扇，或小刀などつかふやうに，はやくふらんとおもふによつて，太刀の道ちがいてふりがたし。それは小刀きざみといひて，太刀にては人のきれざるもの也。」(88頁)と早く細かく振ることの否定したおしえに対しても，あまり活用できるとはいえない。これは，現在の剣道は斬ることでなく，槓杆作用を用いて打つことであり，打突の正確性はもちろんのこと，さらに，スピードをも要求されているためである。

このところが，現在の「刃筋の通らない打突」という批判の原因のひとつといえよう。

## 3. まとめ

本稿は，現在の剣道に「刀剣による理法」をどのように受け止めるかという課題を明らかにするための第一次的作業として，宮本武蔵の『五輪書』（水の巻）における基礎的な諸動作について考察を試みた。さらに，それを現在の剣道の打突技術に当てはまる基礎動作と比較した。

その結果を要約すれば，下記の通りである。

1). 姿　勢

武蔵は，日常から絶えず敵を意識しながら身に付けていくことと指摘している。それは，「構える」という潜在意識によって成り立っており，現在の姿勢の用語として用いられている「自然体」を意味するものである。また，この姿勢には，目的達成のために形式に拘らないという自由性をもっている。しかし，現在の剣道では，目的達成のためのひとつの要因とされているため，専門的な特定の形にはめているといえるのである。

2). 目　付

武蔵は，ある一定の箇所を見ることを否定しており，全体的に見る「観目の目付」，「遠山の目付」を説いている。この目付は，現在でも十分活用されているが，剣道の特性から考えると，その目付の範囲が幾分狭まっているのではないかと思われる。それは，試合や稽古を構成する規範，ルール等の客体的要因が存在するからである。

3). 刀（竹刀）の持ち方

ここでは，現在の竹刀の持ち方に関して，武蔵の刀の持ち方がそのまま活用されている。つまり，斬る時（打つ時）に必要な「絞る」という瞬間的な握りを基にしていることである。しかし，現在の打突技術に必要とされている槓杆作用を用いるための持ち方としては，疑問が残る。

4). 足の使い方

武蔵は，足の使い方を歩行のように絶えず左右，右左と用いることと説いている。また，飛ぶような足，浮きあがるような足，さらに，地面や床に固着する足等はよくないとしている。それに対し現在の剣道では，武蔵の否定している，飛び込み（踏み込み）足を最も重要としているのである。さらに，この動作を用いるために，まず足の位置を設定し，そして四つの足の使い方をその状況によって使い分けている。

5). 構　え

ここでは，構えに対する考え方，態度に姿勢と同様の違いがみられた。

武蔵の説く構えは，常に攻撃のための構え方であり，勝つためにはこの構えに拘らない自由性をもっている。それに対し現在の剣道では，

攻撃および防御を備えた構えであり，有効打突獲得のためにこの構えが重要視され固定化されているのである。

6). 振り方

振り方，つまり，刃筋については，現在の剣道に活用することができる。しかし，振り方の方向については，体の正中線を基にしているため，武蔵の横に振ることは禁物とされている。また，武蔵が早く細かく振ることを否定した点についても，逆に要求していることであり，スピードと連続して打つことが必要とされているのである。

以上，武蔵の「斬撃技術」と現在の剣道の「打突技術」の相違点がいくつか挙げられた。その根底にあるのは，武蔵は全て自然の法則に従うものとして，ある特定の形として固定することを絶えず否定しているのである。それは，あくまでも目的を重視したものと考える。しかし，現在の剣道では，この古流の法則に従いながらも，ある反面，目的のために必要な形式を重視しており，そこにある特定の形を当てはめ固定化しているのである。

つまり，ここが様々な問題を生じさせているところであると考えられる。

## 註

1) この問題は，昭和43年日本武道学会が設定されて以来，現在まで最もトピカルな課題として論及されてきた。ある意味においてこの問題は，戦後の武道史および武道学研究史を象徴しているといってよい。

2) 今年度より，出場資格が六段以上となり，試合においても判定制を取り入れるなど，新しい試みでスタートすることになった。

3) 最近，勝負本位の試合を見直す試みとし，基本判定試合が少年剣道大会に導入されている。これは，両チームの監督と選手によって行なう基本技術を三人の審判員が判定するものである。

4) （例えば，剣道日本で「古流の技を活かす」第7巻第7号，1982年また，「形稽古のすすめ」第9巻第7号，1984年が，剣道時代では「現代剣道が宮本武蔵の剣理から学ぶもの」第11巻第5号，1984年が企画された。）

5) 以下同書からの引用は，神子侃訳『宮本武蔵「五輪書」』（徳間書店，1981年）に拠る。

6) 矢野一郎編『姿勢と健康』日本経済新聞社，12頁，1983年。

7) 矢野，前掲書，144—145頁。

8) 谷田左一『剣道神髄と指導法詳説』秋文堂書店，409頁，1941年。

9) 谷田，前掲書，407頁。

10) 高野佐三郎『剣道』島津書房，119頁，1982年。

11) 佐藤卯吉『永遠なる剣道』講談社，114頁，1975年。

12) 中野八十二『剣道』旺文社，45頁，1976年。

# A Comparative Study of Fundamental Movements in Modern Kendo and *Gorinnosho* (I)

Koji SHIMOJIMA
Yoshiaki TODO

The purpose of this study is to clarify the sword techniques in Gorinnosho written by Musashi Miyamoto.

In this study we compared Modern Kendo with Gorinnosho in fundamental movements. They are posture, metuke (a shrewd iudge of the opponent's trick and weak point), grip, foot work, kamae (offensive and defensive posture) and swing. we summarized as follows:

(1) posture, kamae and swing

Musashi puts more emphasis on the result of fight than the manner or the style, which means that he does not wish to be restrained by the manner on the style too much. The style and the manner are the most important things in Modern Kendo.

(2) metuke

Musashi is metuke seeing through the opponent's trick is a little narrow compared with the metuke of Modern Kendo.

(3) grip

We can find some differences between the hitting techniques.

(4) foot work

Musashi always moves based on his foot work. But in Modern Kendo there are four kinds of foot work techniques according to the condition of the game.